

ペテロの手紙第二 第1章 24～25節a

「人はみな草のようで、その栄は、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。」

花の移ろいやすさが際立つ季節がある。土手伝いに咲き誇った桜は一瞬の輝きを放ち、いまは水面に漂う花弁となった。たとえ低温が続いても、わずか数日だけ花のいのちが延びるだけだ。雨風にみまわれるものならば、散り始めはいっそう早まる。自然は移ろいやすく季節の案内役をになう。その移ろいやすさのなかに、人がいる。冒頭のみことばは、人の変わりゆくことを明言するために草花を取り上げている。知るべきは草花を見ている人のはかなさである。

草にも、花にも栄えるときはある。それぞれにピーク時がある。人にもあるが、その果てに栄が朽ちるときがくる。しかし、人は草や花とは異なった出会いが可能だ。朽ちる者が朽ちない世界に出会うチャンスが与えられている。移ろう自然には無いチャンスがある。

このチャンスの扉が、しかし、である。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。与えられたチャンスは、主のことばを聞くことである。みことばにより、主にお会いすることである。主の招きにお応えすることができる。人は、とこしえに変わることがない主にお会いし生かされる。

2022年4月14日